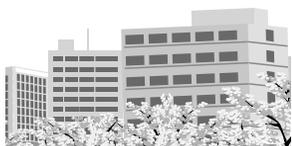


## 会員の広場



### WBCと大谷翔平の人間力

山田 豊（東京）

第五回WBC（ワールド・ベースボール・クラシック）は日本代表「侍ジャパン」がアメリカを破り、三度目の優勝を果たした。この背景には、栗山英樹監督の「信頼・尊重・感謝」を基軸にした見事なチームマネジメントがあったが、選手の中での貢献度を見ると、チームメートの精神的支えとなり、勝利に向けてリーダーシップを発揮した大谷翔平が果た

した役割は、極めて大きいものがあつた。以下では、テレビ観戦などで特に印象に残った場面、気づいた点を記してみた。

米国との最終戦直前のロッカールームで「侍ジャパン」を鼓舞したのは大谷翔平だった。「野球をやっていたら誰しもが聞いたことがある選手（米国の超一流選手）がいる。でも憧れてしまつては超えられない。僕らは

トップになるために来た。きょう一日だけは彼らへの憧れを捨てて、勝つことだけ考えていきましょう」と。勝利への執念を感じさせる、この言葉は米国メディアでも名言として大きく取り上げられたが、「侍ジャパン」の選手にも大きな勇気をもたらすものだった。

準決勝のメキシコ戦では、5対4でリードされていた9回裏に先頭の大谷翔平は二塁打

を打つた際、塁上で大きな雄叫びをあげ、自チームの選手の奮起を促し、逆転への道筋をつくつたのは素晴らしかった。

準々決勝のイタリア戦では、3回ランナー一塁の場面でセーフティバントを決め、その後の4得点につなげたのは見事だった。超一流の選手は何でもできることを示した格好だが、また勝つことへの執念を感じさせるものだった。

最優秀選手（MVP）に選ばれた大谷翔平はインタビューで、「日本だけでなく、韓国も台湾も中国も、その他の国も、もっともっと野球を大好きになつてもらえるようにその一歩として優勝できてよかった。（アジアの野球界が）そうなってくれることを願っている」と述べた。この発言を受けた韓国メディアは、

「インタビューの場で他国を配慮する姿を見ると、彼を愛さずにはいられない」と称賛した。

こうした内外の反響を見聞するにつけ、大谷翔平の器・度量の大きさ、人をひきつける人間力を感じざるをえない。こうした豊かな人間力形成の原点は、花巻東高時代に佐々木洋監督の指導のもとに作成した「目標達成チェックシート」を真面目に実践し、頑健な体づくり、メンタル面の強化、人間性の涵養に努めたことにある。（この点は昨年6月号の「会員の広場」で紹介させていただいた）

天性の明るさに加えて、自信に満ちた思考力、謙虚な姿勢を併せ持つ大谷翔平が今後も大きく進化し投打二刀流の真髄を発揮する中で、野球を気軽に楽しみ感動する老若男女、ファン層が拡大していくことを大いに期待したい。